

社会的資料としての生活マンガ

—60年代から90年代まで—

西 脇 和 彦

Comics of Daily Life as Social Data

— from 1960s to 1990s —

Kazuhiko NISHIWAKI

There are diverse materials for cultural sociology, modernology, and life history; photos, songs, interviews, news items, diaries and so on. In this paper, I choose 7 comics each representing a particular period. For example, “3-chome no Yuuhi” (by Ryouhei SAIGAN) from ‘Pre-High’ growth period, “Apron-obasan” & “Sazae-san” (by Machiko HASEGAWA) from ‘High’ growth period, “Chibimaruko-chan” (by Momoko SAKURA) from ‘Low’ growth period, “Tampopo-san no Uta” (by Ryouhei SAIGAN) from ‘Bubble’ (financial euphoria) period, and “Tonarino Yamada-kun” (by Hisaichi ISHII) & “ATASHIn’CHI” (by Eiko KERA) from ‘Heisei Depression’ period.

They mainly depict the daily life of each period and often reflect events, episodes, well-known persons and consumer’s durables of those days. So, we can see popular styles of living in each period through them. That is why comics of daily life are excellent social data.

This is also an essay on cultural study using comics of daily life.

Key words: comic (コミック), daily life (日常生活), popular style of living (庶民の暮らし), Sazae-san (サザエさん), Chibimaruko-chan (ちびまる子ちゃん), ATASHIn’CHI (あたしノち)

1 はじめに

家族を社会学的、生活文化的に考察する時に、家族の写真集や新聞読者の投稿欄などが思いがけないほどの資料価値をもつことがある。例えば、それらから時代の気分やライフサイクル、衣食住をはじめ人間関係の機微まで読みとれることがある。筆者は社会学的、生活文化的視座からそれらが包括的に時代性を反映している点に関心をもっているが、試みに手元にある『よりすぐり川柳「平成家族」—これが我が家のルールです—』(リビング新聞ネットワーク編, 祥伝社黄金文庫, 2002年)を見ると、父親はもはや経済的あるいは精神的な大黒柱とはいえず、大黒板ぐらゐの存在に変容しているのである。ちなみ

に、朝日新聞世論調査部の「第25回定期国民意識調査」(2000年12月実施)によると、家族のきずなが弱まっているとする者46%、変わらないとする者33%、父親は中心的な存在と思うか否かについて、そう思う者40%、思わない者56%とある(朝日総研レポート, 2003. 2, No.160, p.154)。大黒柱という語は死語化しつつあるのかもしれない。一人の大黒柱よりも、家族メンバーによるシェアの時代の到来を予感させる。タテからヨコの家族関係へ、現に母娘の関係では、若年女性の6割が友達親子を肯定している(内閣府編『平成15年版 国民生活白書』ぎょうせい, p.127)。早晚父と息子の関係も友達親子に近づくに違いない。

ともかく筆者は具体的で有用な資料を模索するな

かで、生活マンガに注目するようになった。全世代にわたる社会的メディアとなったマンガ(コミックス)には、スポーツ・SF・変身・文学など多様なジャンルが存在するが、そのなかでも特に日常生活に題材をとった生活マンガに有用性を認めている。それは、次のような理由による。

これまで生活資料として学校教材にも利用された代表例は、長谷川町子の『サザエさん』であった。朝日新聞に連載されたこの作品(現在は朝日新聞社、文庫版、全45巻に再録)は、戦後の復興期から高度成長期の終焉まで実に30年近い長期にわたったシリーズであり、生活資料の宝庫といえる。そのなかから衣食住に関連した数例をあげてみよう。例えば、一家はしばしば海水浴に行ったが、その時々でサザエさんの水着が異なっていたこと(ワンピース→セパレート→ビキニと進化?)。戦後しばらくは七輪で炊飯をし、ご飯もお釜で炊いてからおひつに移し換えていたが、電気炊飯器を購入してから後おひつは使われなくなり、炊飯器から直接ご飯をよそうようになったこと。銭湯シーンがシリーズ当初こそ登場するが、やがて自家の内風呂のみとなること。このように、マンガ『サザエさん』では高度成長によって変容した社会や日常生活が視覚的に具体的に描写されている。この庶民の等身大の生活風景ゆえにわれわれに共感をもたらし、国民的人気作品となっている。

そこで同様の視点から、資料として有用な生活マンガを年代順に提示し、そこに描かれている生活世界からその時代性を指摘していく。その年代とは、助走期-60年代-70年代-80年代-90年代であり、それぞれに適合する生活マンガをとりあげていくが、各生活マンガを歴史・社会的資料として扱う社会学的文化論の試みでもある。

2 助走期資料としての

『三丁目の夕日』(西岸良平^{さいがん})

昭和三十年代——。あの頃は、今のように贅沢はできなかったけれど、人々の間に温かな触れ合いがあった。…

この作品のシリーズはすべてこのフレーズから始まる。My First BIG『三丁目の夕日』(小学館、初出はビッグコミックオリジナル)は、わが国の高度成長が本格化する前の風景を描いて秀逸な作品といえる。そこにはまだゆったりとした時が流れている。この時代を共通体験した人々にとって懐かしい光景が連続する。筆者が所有する作品から各テーマとそのキャッチコピーを引用し表1にまとめた。

このシリーズを見ると、高度成長期以降の社会生活のなかで、消滅したりあるいは忘却されたものが多数描写されている。数例をあげると、銭湯で入れ墨をした人を見て驚く話・軒先で縁台将棋に興じる話・電灯の二股ソケットから電気をとる話・電報を郵便局で申し込む話・写真館で記念写真を撮る話・夜道が暗く怖かった話・引っ越しそばを配った話・弁当箱のふたで湯茶を飲んだ話などなど。さらに、包丁研ぎ・呼び出し電話・プールのない学校・中古自転車・陰膳・蚊帳・夏座敷・昔の客車・ブリキのおもちゃ・おとしトイレ・氷柱・粉末ジュース・井戸水・案山子・ボンネットバス・ダルマストーブに関連したエピソードもある。筆者も同様の体験をしたことを多々思い出した。内風呂がなく曜日毎に別々の銭湯に行ったこと・呼び出し電話の取り次ぎで気を遣ったこと・はじめのうち小学校にプールがなく遠方の市民プールまで1日ばかりで行ったこと・ダルマストーブの焚き方にはコツがあること・弁当箱から煮汁がしみ出して教科書を汚したこと・夏期、ホールやデパートには氷柱が置かれていたが、見た目ほどには涼しくなかったこと・電車が通過する毎に踏み切り番のおじさんが遮断機の開閉をしていたことなど。これらは、高度成長が始まりだしたとはいえまだそれほど豊かではなかった時代の風景といえる。まさに繁栄の60年代へと結節する助走期のそれといえるだろう。『三丁目の夕日』にはそんな時代の生活資料がリアルに満載されている。

3 60年代資料としての『エプロンおばさん』と『サザエさん』(長谷川町子)

高度成長期を前半と後半に分けると、60年代前半が同期の前半に、同年代後半が同期の後半にほぼ対

表1 『三丁目の夕日』のテーマとそのキャッチコピー

お祭り	お祭り, 海水浴, 肝試し, 小旅行, 野球大会…。町ぐるみの催しものがたくさんありました。
精霊流し	静かな夏がありました。
二学期	始業式の日, 日焼けした友達に会えました。
三丁目動物記	命の大切さを教えてくれた小さな友達がたくさんいました。
夕焼け	赤く染まっていく町が好きでした。
マイホーム	お茶の間がみんなの集まる場所でした。
木枯らし	エアコンがある今のマンションよりすきま風だらけだった昔の家の方が暖かかった気がします。
歳末大売り出し	豪華な景品はなかったけれど, 福引きの時はワクワクしました。
年末年始	もういくつ寝ると, 楽しいお正月がやってきます。
空想科学物語	未来はいつもバラ色でした。
三丁目探偵団	毎日が冒険の連続でした。
入学式	あの桜の花の中には思い出がいっぱい詰まっています。
行楽日和	小さな時の旅の思い出は決してなくなるならない“心の宝物”です。
背くらべ	柱のキズと一緒に, 思い出も心に刻まれました。
五月晴	五月病なんて知りませんでした。
犬の思い出	犬が最初の友達でした。
夏の思い出	暑かったのに, いつも外で遊んでいた。
夏休み	夏休みの宿題は, いつも後回しでした。
家族旅行	初めて海を見たときの驚きは, 今も忘れられません。
鯛雲	あの頃は, よく雲を眺めていました。
お月見	十五夜の月は今より大きく見えました。
運動会	徒競走の前はいつもドキドキでした。
紅葉の頃	昔は町内のあちらこちらで, 紅葉が見られたものでした。
紙芝居の来る町	あの紙芝居やさんは, 今どこにいるのだろうか?
冬支度	昔の冬は今よりずっと寒かったけれど, 家の中は, 今よりずっと温かでした。
シングル・ベル ゆく年くる年	クリスマス, 大晦日, お正月。 いつも家族が一緒でした。
福は内	幸福は家にありました。
春一番	春一番は, いつも知らぬ間に吹いていました。
卒業式	「我が師の恩」の有り難さが分かったのは, つい最近のことでした。
サクラ	桜の儂い色が好きでした。
クラス替え	同じクラスになるだけで, すぐ友達になれました。
切手集め	他人には価値のないものでも, 自分にはとても大切なものがあります。

2004年4月末日現在

応する。そこで、前者の資料として『エプロンおばさん』を、後者のそれとして『サザエさん』を援用する。いずれも長谷川町子の代表作である。

A 『エプロンおばさん』

当初このシリーズは、週刊誌「サンデー毎日」に57年から65年まで連載されたもので（現在は朝日新聞社、文庫版、全7巻に再録）、夫婦と一人娘の主人公一家とそこに下宿する勤め人や学生との人情話がテーマとなっている。夫はサラリーマン、娘は高校生らしい。2階の部屋を間貸しして、いわゆる下宿屋も営んでいる。下宿人の賄いや世話を焼くのがこの家の妻、エプロンおばさんである。ただし、実際はエプロンでなく、かっぱう着を愛用しているが。ところで、この下宿自体が当時の住生活のキーワードとなっている。都市化による人口集中は住宅不足をもたらし、そこに発生した現象が下宿というわけである。このシリーズのうち60年代前半の作品には、次のようなエピソードが登場する。（％は当時の普及率）電気洗濯機（50～70％）や電気冷蔵庫（17～51％）それに電気炊飯器の購入と使い方・遠隔地の土地分譲・ゴルフ熱・男性の女性化・東京の水不足と断水・プロ野球長嶋選手の結婚・東京五輪後の不況・詰め込み教育反対・怪電話事件・下宿人の態度に閉口など。面白いことに60年代前半の様相にはすでに今日の生活文化の先駆けが見られる。この作品は当時の生活世界をリアルに再現して、『サザエさん』同様優れた生活資料の1つとみなすことができる。

B 『サザエさん』

60年代後半は高度成長期の後半とも重複するが、高度成長の全国への波及と負の遺産も顕在化した時代といえる。利便性だけでなく問題点や矛盾点にも目を向けざるをえなくなった。こうした様相はこの時代の『サザエさん』にも色濃く反映している。そこで、このシリーズのうち66年から70年にかけて発表された作品のなかから、そこに登場した事柄や出来事をキーワードとして表2にまとめた。昭和元禄といわれた泰平的ムードのなかに一抹の不安がよぎっていたことがわかる。

ところで、66年の作品にマスオとサザエが知人の別荘の留守番をするシーンがあるが、そこには当時まだ珍しかったクーラーやカラーテレビが置かれ、それらに大喜びして別荘気分を満喫する2人が描かれている。同年の世帯普及率がクーラー2％、カラーテレビ0.3％であったことを考えると納得できるシーンといえる。また翌年の67年には長寿化をテーマとした話が登場して平均寿命が男性68歳、女性73歳と説明されているが、この数値も妥当なものといえる。さらに、世帯人員が近い将来3人になると予測する話も66年と69年に登場するが、当時のそれは3.7～3.6人もあった。その他、知人が近郊に土地を購入した話、マスオの同僚が新築した家が高台にある話、遠距離通勤が増加した話など、当時から郊外化に関連したテーマも見られた。公害・汚染・スモッグ・騒音など、環境問題も多く登場しているが、この一例として70年の1コマに新宿区牛込柳町の大気汚染がとりあげられている。筆者は偶然にも同時期そこに住んでいたので、すり鉢状の交差点の大気がいつもすすけてよどんでいたことや住民が「公害公害」と大騒ぎをしたことを思い出した。

このほかにも、ミニスカート・自動車や飛行機の事故・男性の弱体化・結婚ラッシュ・第2次ベビーブームなどの話題がしばしば登場して、当時の社会状況を巧みに描写している。さすが敬語もテーマとするだけに、作品全体に丁寧な言葉遣いがなされている。また、同居生活のむずかしさや子どもの夏休みがやっと終わってホッとする親の話など、時代を超えて共感できるものも多い。

総じて60年代は現代生活の基盤が構築された時代である。そしてこの時代の具体的資料として援用できる生活マンガの好例を長谷川町子の作品群に見いだすことができる。

4 70年代資料としての

『ちびまる子ちゃん』（さくらももこ）

73年のオイルショック以降のいわゆる低成長期に適合的な資料がこの『ちびまる子ちゃん』（現在は集英社、りぼんマスコットコミックス、全15巻に収録）である。それは、作品内容から推測して72年から78年

表2 『サザエさん』(60年代後半)のキーワード

食生活	ダイエット 自然食品 冷凍食品 有害食品 2ドア冷蔵庫
衣生活	かつら・ヘアピース ミニスカート(ひざ上10・20cm) 長髪
住生活	団地建設 宅地造成・分譲 セントラルヒーティング 高層アパート
交通・運輸	自動車・飛行機事故 渋滞 ムチウチ症 ワンマンカー 東名高速 遠距離通勤 帰省列車
教育・学校	教育ママ 過保護 正しい敬語 越境入学 鍵っ子 子殺し 性教育 学園紛争・全学連 昆虫をデパートで買う
医療・福祉	牛込柳町 老後の生活 献血 長寿化 肥満児 ムチウチ症 美容整形 スモッグ 騒音 心臓移植 老人病 公害・汚染 大病院の順番待ち
社会・ジェンダー	女性上位 男性の女性化 男性の家事参加 多趣味な奥様 体育の日 3人家族時代 敬老の日 盗作問題 主婦の家出 蒸発 親子の断絶 密輸 赤ちゃんのとり違え 結婚ラッシュ・第2次ベビーブーム 転職増加 集団就職 おやじの地位低下 フーテン族 三億円事件 銭湯の廃業 エリートの汚職 サイドビジネス 訪問販売 三島事件
文化・その他	イミテーション(ダイヤ) 大鵬の結婚 同居のむずかしさ グループサウンズ モーニングショー メキシコ五輪 明治百年恩赦 宇宙中継 マジックミラー テレビ電話 誇大広告 簡便な紙製品 マンガブーム アポロ11号 ブルーライトヨコハマ 大阪万博 海外旅行 八百長試合 黒人モデル 不幸の手紙

当時の家庭や学校の生活が描かれているからである。

主人公は、作者の分身とおぼしき清水市(現、静岡市)に住む小学生の女の子で、祖父母・両親・姉からなる3世代6人家族の次女である。ちなみに、75年当時の3世代家族は約16%である。一家は平屋の一戸建てに住むが、周囲の家屋も平屋が多く、2階建てや低層アパートは散見されるだけである。日常の買い物は商店街ですませ、スーパーは登場しない。ただ1度だけ主人公が祖父(友蔵)とショッピングセンターに行くシーンがある。自宅には、ダイヤル式の電話機や2ドア式冷蔵庫、それに室内アンテナで見るテレビがある。しかし、ルームクーラーはまだない。裕福な同級生(花輪くんと穂波さん)の自宅にはあるが、75年の普及率が17%であった当時、主人公の要望に対して母親が「クーラーは家にはぜいたく品」と述べているのは当然のことで、一般的にはまだまだ高級品の域をでるものではなかった。この普及率が50%を超えるのは10年後の85年である。同様に、水洗トイレへの改修を主人公が両親に要求するシーンも登場するが、75年のトイレ水洗化率はまだ4割前後でしかなかった(経済企画庁編『平成7年版 国民生活白書』ぎょうせい, p.41, p.388)。また、

シリーズの最後でマイカーも登場するが、当時の普及率は50%でなんとクーラーのそれをはるかに凌いでいたのであった。その他、宅配便をめぐる話や祖父が主人公のためにと支給されたばかりの自分の年金を全額(8万円)つき込む話、母親が主人公に青春とは「中学生から25歳ぐらいまで」と説明する話など、70年代に適合した庶民の生活風景がふんだんに盛り込まれている。青春についても、高等教育への進学率が低成長期とはいえ38%にも上昇し、青年期は延長されモラトリアム性が強化されつつあった。モラトリアム(役割猶予)も大人になるための準備的段階からそれ自体を享受する目的化した段階へと転化しつつあった。こうした社会状況を踏まえると、青春の終焉を「25歳ぐらい」とした母親の説明には妥当性が認められる。

『ちびまる子ちゃん』シリーズに登場した出来事・事柄・人物をキーワードとして表3にまとめた。子どもの世界を反映してか当時の娯楽や芸能関連のものが多い。また、シリーズ全巻を通じて父親の仕事に関連するシーンがないことも特色といえる。70年代はわが国の社会構造が第3次産業中心にシフトし、郊外化もさらに進行するにおよんで職場で働く大人

や両親の姿が見えにくくなった時代である。家庭は消費生活の場となり、子どもの生活圏から生産や労働の場は遠ざかってしまった。最後に家族全員が食卓につく時の父親（ひろし）の座席には4通りあることを指摘しておきたい。消費家族のソフトで、流動的な位置関係が見られる食卓風景といえるだろう。

5 80年代資料としての『たんぽぽさんの詩』(西岸良平)

当初女性週刊誌『微笑』に77年から87年にわたって連載された本作品（現在は双葉社，ACTION COMICS，全5巻に収録）は，その内容から81年以降の部分をもって80年代資料とするのにふさわしい。

たんぽぽ・慎平という夫婦と一人娘のスミレ（それに猫1匹）の3.5人家族の主人公一家は横浜市の海沿いの高台に住んでいる。見晴らしはよいが，安い家賃と引き替えにバス停からは遠く，坂道を歩かなければ家にたどり着かない。都心までかなり時間もかかる。その代わり逆方向の湘南や三浦半島，箱根へのアクセスはとてもよく，日帰りでも十分に楽しめる。この時代に顕著となった郊外の遠隔地化を反映した地域設定となっている。郊外レストラン，過剰な演出による豪華結婚式，ブランドやグルメ，海

外ロケやFFブームも登場し，まさにバブル期の雰囲気^{うた}が充満した80年代風景が作品にちりばめられている。年賀状にわが子の写真をプリントしたり，小学校の給食会に保護者が参加し美味しい食事に驚いたり，ほほえましい光景も見られる。しかし，サラ金地獄やローン地獄，個人化するゲームの危険性などネガティブな光景も指摘されている。さらに，一人っ子同士の結婚や子どもっばい親の増加も取りあげられている。全体的に表出的，個人的なトレンドが作品に反映しているが，先行時代にも増してこの時代にモラトリアム性が強まったためといえるだろう。この作品に登場する出来事や事柄をキーワードとして表4にまとめた。

先述した4作品の食卓はすべて茶の間にあっただが，この作品では冬場を除いてテーブルとイスの洋風スタイルで，各人の位置もほぼ一定している。夫の座席は水回りから最も遠く，子どものそれはテレビの正面にある。夫も家事を手伝うニューファミリーではあるが，妻の座席は水回りや食器棚に近く，やはりこの家の役割分担を食卓に見ることができる。

表3 『ちびまる子ちゃん』(70年代)のキーワード

出来事	オイルショック 紙不足 不幸の手紙 ツチノコ騒動 浅間山荘事件
娯楽	ディスコ ローラーズルーゴーゴー スーパーカーブーム
芸能	森田健作 ピンクレディー フィンガー5 山口百恵 桂三枝 ドリフターズ にしきのあきら 悪役商会 月亭可朝 山本リンダ 殿さまキングス 天地真理 ずうとるび 円広志 仮面ライダー
流行語	港のヨーコ・ヨコスカ・ヨコハマ な〜んちゃって ノストラダムスの大予言

表4 『たんぽぽさんの詩』(80年代)のキーワード

社会・ジェンダー	遠距離通勤 飛行機事故 サラ金 カードローン ファミレス 海外旅行 女性の自立 夫の家事協力 ダイエット・シェイプアップ
メディア	プロ野球ニュース 金妻 FFブーム グルメブーム テレビショッピング レンタルビデオ
流行語	なめんなよ フィーバー ムニユムニユ ルンルン ビョーキ 田園調布

6 90年代資料としての

『となりの山田くん』(いしいひさいち)と 『あたしんち』(けらえいこ)

90年代の生活マンガとしてこの2作品をあげることができる。同年代を前半と後半に2区分すると、前半には『となりの山田くん』が、後半には『あたしんち』がそれぞれ適合する。時代背景としてはいずれも平成不況下にあるが、この2作品に見られる資料的価値を指摘しよう。

A 『となりの山田くん』

祖母と両親、2人兄妹の5人からなる3世代同居の山田家を描くこのシリーズは、朝日新聞の朝刊に91年秋から97年春まで連載された風刺とユーモアにあふれた作品である(現在は東京創元社、文庫版、全11巻に収録)。例えば、口答えるナマイキな粗大ゴミ(オヤジ)をナマゴミと呼んでみたり、帰宅した父親に「子どもの寝顔を見ると疲れがとぶが、妻の寝顔を見ると眠気がとぶ」と言わせている。ちなみに、同居する祖母(山野しげ)は妻(まつ子)の母親である。

ところで、この作品で特筆すべきことは、家族といえども好みが各人各様であったり、父親(たかし)

の食卓の座席には猫が居座っていたりと、父親の居場所が空間的にも精神的にも家庭のなかになくなりつつある個化的家族風景が盛り込まれていて、これまでの生活マンガには登場しなかったシーンが散見されるようになったことである。同様のことは次に取りあげる『あたしんち』でも指摘できるが、家族一人ひとりが自由度を増した結果家族の絆は弱体化し、父親・夫の存在感も稀薄化したのである。なお、本稿では90年代前半の資料として援用するため91年から95年までの作品に限定したが、バブル経済破綻以後の不況を反映したテーマが多く見られ、例えば、空店舗・節約励行・在庫調整・不良債権・退職奨励金・就職難(どしゃぶり・氷河期・無間地獄)といった話題が登場する。また、社会的事件を連想させる話題も多く、やらせ番組・院内感染・フリーズ・ヤミ取引・ロングマフラー・兵庫県南部地震・オウム真理教・証拠インメツなどがその例としてあげられる。そしてもちろん、この時代を賑わせた角界や球界、政界の著名人も登場する。表5に『となりの山田くん』に見られるテーマ、出来事、事柄、人物をキーワードとしてまとめた。

最後に山田家の食卓について、祖母と兄(中学生、のぼる)の2人に位置の交換が時々見られるが、両親と妹(小学生、のの子)の3人に移動はない。専

表5 『となりの山田くん』(90年代前半)のキーワード

家庭生活	食器乾燥機 タイ米 オートロック 偉大な親 むね落葉・粗大ゴミ
政治・経済・ビジネス	PKO ヤミ献金 証人喚問 日本新党 短命内閣 不良債権 在庫調整 ヤミ取引 宅地分譲 価格破壊 就職難
医療・福祉	万歩計 花粉症 院内感染 喫煙コーナー 義援金
環境	エコロジー 高台の住宅地 エルニーニョ現象
教育・学校	センター試験 いじめ 第2土曜休日
社会	親切スリ オウム・サティアン やらせ番組
文化・科学	ヘクトパスカル 恐竜ブーム 断筆宣言 使い捨てカメラ
娯楽	郊外パチンコ ジャンボ宝くじ テレビゲーム
スポーツ	サッカーブーム・イエローカード
流行語	フリーズ やればァ うまいんだなこれが 同情するなら金をくれ かわらなきゃ
各界の有名人	角界…曙 舞の海 貴花田 若花田 球界…野茂英雄 松井秀喜 政界…クリントン 細川護熙 羽田孜 その他…毛利衛 三浦和良 大林素子 ハーディング マラドーナ

業主婦の母親を中心とした食卓風景が見られる。家庭での父親はゴロ寝スタイルが目立ち、大黒柱の雰囲気はない。家の手伝いをしてもらって失敗に終わるケースがほとんどで、濡れ落ち葉的な足手まといとなっている。とにかく祖母と母親の元気の良さ、パワーが目立つ山田家なのだ。

B 『あたしち』

典型的な核家族、4人家族の橘一家を主人公とする『あたしち』は、94年から読売新聞日曜版に連載されているシリーズ（現在はメディアファクトリーコミック、9巻まで言及）で、目下アニメとしてテレビでも放映されている。なお本稿では、96年以降の作品を援用している。

電車とバスを利用して通勤する郊外らしき団地に居住する一家の平凡な日常生活を描いた作品であるが、思わず考えさせられる内容もいくつかある。例えば、ささいなことを配偶者に報告相談する割には、重大事項を相談せずに独断専行する夫婦、フォーク並びを知らずに割り込んだ人を注意すべきか否かで悩む息子（ユズヒコ）、靴を履いたままの幼児を電車のシートに立たせた親を見てむかつく娘（みかん）などのシーンがある。そのなかでも、母親と娘の進学に関する会話で、母親の「生活を切りつめて大学に行かそうと考えているのに」との発言に対して娘が「フツータのむから大学行ってくれと言うのに」とやり返すシーンがある。いかにも同時代的な世代間ギャップが表現されていて関心を引く。不況下とはいえ、大学進学率が46%時代のことはある。主人公の母親は専業主婦で日中は自転車を乗り回し（自転車ママ）、家事に忙殺されている（忙中閑の時もあるが）。これに対してサラリーマンの父親が仕事に励むシーンは皆無といってよく、彼は夕食後に定位置のソファに座ってぼんやりとテレビを見てくつろぐかあるいは入浴するパターンで描かれている。子どもには個室があるが父親には居場所がないこともあるだろう。ここでも父親は家庭では手のかかるダメオヤジとして扱われている。発言もあまりない。職住分離時代の究極の姿かもしれない。また同時代を反映して、イタズラ（H）電話・抗菌

グッズ・ジベタリアン・エアロビ・体脂肪計・回転寿司・カミングアウト・ニュー銭湯などのエピソードが登場する。さらに一家の耐久消費財に注目してみると、キッチンに置かれた冷蔵庫も大型の3ドア式となっている。システムキッチンも導入されているのだろうか、興味もたれる。パソコンも1台は所有し、しばしばその話題が登場する。

このように『あたしち』は90年代後半の様相を日常レベルで見事に活写した作品と評価することができる。なお、一家の食卓での座席は一定（父と娘、母と息子が向かい合うパターン）で、テーブルとイスの洋風スタイルが年間を通じて見られる。

7 おわりに

本稿では高度成長の黎明期から2000年までの各時期に相当した生活マンガを援用して、これらがその時代の空気を反映し、われわれ受け手も共感をもって受容しているところから、生活マンガが現代社会や家庭生活の優れた資料になりうることを指摘した。リアリティの再現に寄与するところが大きく、ここに生活資料として評価できる理由がある。

表6は60年代以降の5作品について、主人公一家が所有する耐久消費財と当時のサービス状況の有無をまとめたものである。通時的に整理してみると、平凡な家庭生活もその変容過程が浮き彫りにされる。卑近な資料も積み重ねることによって時代的に貴重な資料に転化するといえる。さらに表7は、耐久消費財の普及率の推移を示しているが、表6と表7を対照させると、普及率の高いものほどその作品の当初から所有されていることがわかる。また当然のことながら普及率の低いものは登場しないか、あるいは途中で購入によって登場することになる。

ところで、3世代家族の視点から『サザエさん』『ちびまる子ちゃん』『となりの山田くん』の3作品を比較してみよう。『サザエさん』の父親（波平）は定年間近とはいえまだ現役世代で、母親（フネ）も家事を担当する。『ちびまる子ちゃん』の祖父母は年金生活者であり、祖父がまる子へのプレゼントに支給されたばかりの年金を全額（8万円）つぎ込むシーンがあった。ところが『となりの山田くん』で

表6 主人公宅の耐久消費財とサービス利用状況

年代	消費材他 作品	カラー テレビ	電気 冷蔵庫	マイカー	クーラー エアコン	VTR	パソコン	電話機 (家庭)	コンビニ	宅配便
65 70	サザエさん 3世代7人	△	△	×	×	×	×	○ ダイヤル式	×	×
	ちびまる子 ちゃん 3世代6人	○	○ 2ドア	△	×	×	×	○ ダイヤル式	×	○
80	たんぼぼ さんの詩 核家族3人	○	○ 2ドア	△	△	△	×	○ ダイヤル式	○	○
90	となりの 山田くん 3世代5人	○	○ 2ドア	○	○	○	△	○ プッシュ式	○	○
95	あたしち 核家族4人	○	○ 3ドア	○	○	○	○	○ プッシュ式	○	○
00										

○…作品の当初から所有(登場) △…途中購入 or 一時所有 ×…なし(登場せず)

表7 耐久消費財の普及率(世帯, %)

年代	消費材他	カラーTV	電気冷蔵庫	マイカー	エアコン	V T R	パソコン	システムキッチン
1965			51.4	9.2	2.0			
70		26.3	89.1	22.1	5.9			
75		90.3	96.7	41.2	17.2			
80		98.2	99.1	57.2	39.2	2.4		
85		99.1	98.4	67.4	52.3	27.8		
90		99.4	98.2	77.3	63.7	66.8	10.6	
95		98.9	97.8	80.0	77.2	73.8	15.6	28.2
2000		99.0	98.0	83.6	86.2	78.6	38.6	39.9

は祖母が大活躍するものの、祖父はすでにいない。
3作品の古い順に平均寿命は男性69歳, 72歳, 76歳,
女性75歳, 77歳, 83歳となり, 高齢化率も同様に,
7%, 8%, 15%となる。したがって, 高齢化社会
に対応する作品が『ちびまる子ちゃん』, 高齢社会
に対応する作品が『となりの山田くん』ということ
になるが, 平均寿命からも納得できる人物設定とな
っている。ちなみに, 高齢者の子どもとの同居率は
前者の時代が7割強, 後者の時代が5割強である。
なお, いずれの作品にも人間の生死を直接扱った
シーンは登場せず, 家族の機能からそれらが完全に

外部化したことをうかがわせる。

最後に指摘しておきたいが, 世帯人員もこれらの
生活マンガの時代に, 1.7~1.8人の減少をみたこと
になるが(表8参照), これは家族内における関係性
が, 時代とともに5つ消滅したことにほかならない。
個人化・私事化の時代を反映し, 近隣との紐帯も弱
体化するなか, 生活マンガの世界でも近隣関係は稀
薄化しつつある。家族や近隣といった人間形成に不
可欠なプライマリな関係性が不足し, しかも崩壊し
かかっている現在, 近隣家族あつての人間から人間
あつての家族・個人の突出へと時代はシフトしてい

表8 世帯人員数（普通世帯）の推移

年次	人員数	人間関係数
1955	4.97	9.9
60	4.54	8.0
65	4.05	6.2
70	3.69	5.0
75	3.45	4.2
80	3.33	3.9
85	3.23	3.6
90	3.06	3.0
95	2.88	2.7
2000	2.71	2.3

人間関係数=人員数(人員数-1)÷2で計算
(西脇)

る。近年とみに多発する脱社会化の病理現象もここに起因するのではないだろうか。

こうして、生活マンガはそれ自体としても、ほかの作品群やデータとの比較からも、社会論や家族論の有効な資料となりうる。援用した作品はいずれもその時代の平均的家族像をもっているがゆえに、生活資料とするに十分な根拠をもっていたといえる。本稿では、生活マンガの社会的・生活文化的考察を企図したが、再度生活マンガの社会的有用性を強調しておきたい。たかが生活マンガ、されど生活マンガ。

*本文中で使用したデータのうち、出所未記入のデータは『平成13年度 国民生活白書 国民の暮らしと構造改革』(内閣府編, ぎょうせい)と『平成15年版 国民生活白書 デフレと生活-若年フリーターの現在』(内閣府編, ぎょうせい)記載のものである。

参考文献・資料 (2001年以降の出版物から)

特集「家族はどうなっているのか?」『世界』第684号,
2001年2月号
林道義『立派な父親になる』童話屋

村上龍『最後の家族』幻冬舎文庫版
信田さよ子『脱常識の家族づくり』中公新書ラクレ
「家族の絆」『文芸春秋』2002年4月臨時増刊号
上野動物園開園120周年記念行事実行委員会『動物園で
撮った家族の写真』平凡社
袖井孝子『日本の住まい 変わる家族』ミネルヴァ書
房
町田忍『懐かしの昭和30年代』扶桑社
加藤嶺夫『東京の消えた風景』小学館
岩村暢子『変わる家族 変わる食卓』勁草書房
賀茂美則『家族革命前夜』集英社インターナショナル
小泉和子『和食の力』平凡社新書
伊田広行『シングル化する日本』洋泉社新書
重松清『お父さんエライ! 単身赴任二十人の仲間たち』
講談社
正高信男『ケータイを持ったサル』中公新書
上野千鶴子『上野千鶴子が文学を社会学する』朝日文
庫
小倉千加子『結婚の条件』朝日新聞社
『ザ★昭和テレビジョン』タカラ
『ATASHIn'CHI House & Family』セガトイズ
阿古真理『ルポ「まる子世代」』集英社新書
河北新報社芸部『大人になった新人類 三十代の自
画像』勁草書房
富岡睦草『東京は変わった 定点撮影50年』岩波フォ
ト絵本
さくらももこ『あのことろ』集英社文庫
山田昌弘「家族の個人化」〈特集・「個人化」と社会の
変容〉日本社会学会編『社会学評論』No.216 (Vol.
54, No. 4/2004) pp.341-354
坂本哲史他「サザエさんをさがして」『だんらん』朝日
新聞, 毎土曜日, 2004. 4. 3~
柴門ふみ『マイリトルタウン』小学館, BIG
COMICS

(にしわき かずひこ 生活文化学科第Ⅱ部)